

PROGRAM

ソナタ	ヘ長調	ハイドン
ソナタ第11番	イ長調 K. 331 (トルコ行進曲付き)	モーツァルト
ソナタ第8番	ハ短調 Op. 13 「悲愴」	ベートーヴェン
ソナタ第1番	ハ長調 Op. 24	ウェーバー
ソナタ (1926)		バルトーク

インタビュアー 朝元 百

四季のコンサート 秋

1990年9月20日(木) PM 6:45
浜松市民会館ホール
主催：浜松音楽友の会

現在は、モスクワ音楽院で後進の指導にもあたり、彼女のクラスからも国際コンクールの受賞者を出している。
の年の12月に日本でも発売され、話題を呼んだ。
レコードも数多く発売され、中でも、1977年よりハイ・ドソのピアノ・ソナタ全集(55曲)を1981年に完成し、そ
年、1982年、1986年、1988年と来日し、幅広い多くのファンを獲得している。
1974年、9月に日本デビュー・コンサートを開き、批評家そして聴衆から絶賛を博した。その後、1976年、1978
タイボウ国際コンクール第1位・大賞に輝き、以来、国際舞台で活躍を始める。
出している有名なヤコフ・ザーク教授の指導を受け、1966年、15歳でパリ国際コンクールに入賞。1969年、ロソ
までしばしば共演している。モスクワ音楽院では、エフゲニー・モギレフスキーなどの優れたピアニストを多く輩
1959年、9歳でオーケストラと共演し、絶賛を博し、ソビエトの著名な作曲家カバレフスキーに認められ、現在
めす。
1951年生まれ。1958年、モスクワ中央音楽学校在学中(8歳)にデビュー・リサイタルを開くという天才ぶりをし

ピアノ・リサイタル



リユーボフ・チモフェーエワ
ピアノ・リサイタル

チェンバロ・ソナタ ヘ長調

ハイドン(1732~1809)

彼は生存中に50数曲のソナタを書いたが、そのうちの50曲がチェンバロ・ソナタで、晩年のわずかに5曲のみがピアノ・ソナタとして作曲されたものである。このような区別がなされたのは、ピアノが一般的に使用されるようになったのが1770年代以降であったことと関係している。ハイドンのチェンバロ・ソナタは1760年頃から書き始められ、最後のピアノ・ソナタは1795年に作曲された。ハイドンがこれらのソナタを書いた時期は、彼がエステルハーザー家に仕えていた頃とはほぼ一致する。従って、エステルハーザー家に仕えたことが、これらのソナタを書く動機になったのであろう。

今夕、演奏されるヘ長調のチェンバロ・ソナタも1773年に作曲され、エステルハーザー家のニコラウス公に捧げられたものである。曲は3つの楽章から成る。明るく軽やかな第1楽章はアレグロ・モデラート、やや憂いを帯びた優美な第2楽章はアダージョ、ハイドン特有の率直で生き生きとした第3楽章はプレストである。

ソナタ 第11番 イ長調 K. 331

モーツァルト(1756~1791)

3楽章から成るソナタ第11番は、1783年頃に作曲された。第1楽章はアンダンテの主題と6つの変奏曲で書かれており、第5変奏でアダージョ、第6変奏でアレグロに変化する。第2楽章はモーツァルトにしては重々しいメヌエットである。この作品がモーツァルトのピアノ・ソナタの中で最も有名になったのは、「トルコ風」と題されたアレグレットの第3楽章(行進曲)のためであるとされている。

モーツァルトが作曲した17曲(数え方によって異なる)のピアノ・ソナタは、すべて3楽章構成である。そのうち、第3楽章には様々なテンポが用いられており一般的な傾向は見られないが、第1楽章はアレグロのものが最も多く(15曲)、第2楽章はアンダンテのものが最も多い(11曲)。従って、第1楽章アンダンテ、第2楽章メヌエットというのは、他に全く例がない構成である。さらに、ソナタ形式がどこにも使われていないソナタであるという点でも、彼のソナタとしては珍しい特徴をもった作品である。

ソナタ 第8番 ハ短調 Op.13

ベートーヴェン(1770~1827)

ベートーヴェンのピアノ・ソナタは40曲近く作曲されたと考えられているが、作品番号が付けられているのは32曲である。今夕演奏されるソナタは、その32曲中の8番目に当たる作品である。1799年ベートーヴェンが29歳の時に作曲したもので、彼の初期のソナタの頂点に位置する作品であるといわれている。「悲愴」という曲名は、彼自身によって付けられたものである。

ベートーヴェンの青年期は、フランス革命の時代であった。彼も音楽家として社会的な自立を目指し、音楽による自己表現の拡大と深化を目標として作曲活動を行った。このソナタには、そうしたベートーヴェンの姿勢がよく現れている。第1楽章は、曲全体の気分を支配するグラーヴェの序奏から始まる。アレグロの主部は、まさに情熱的な音楽である。アダージョの第2楽章は、ピアノでこれ以上スケールの大きな歌謡的な音楽を作ることは不可能ではないかと思われるほどのものである。アレグロの第3楽章はロンド形式で書かれており、哀愁を帯びた主題が4回再現する。

ソナタ 第1番 ハ長調 Op. 24

ウェーバー(1786~1826)

ウェーバーは4曲のピアノ・ソナタを書いた。1810年から1812年にかけて、彼はドイツ各地で演奏旅行をしていたが、このピアノ・ソナタ第1番は1812年にベルリンで完成された。彼は、ベートーヴェンよりも1年早く、1826年に40歳で亡くなっている。つまり、ウェーバーとベートーヴェンは全く同じ時代に活躍した作曲家である。それにもかかわらず、ウェーバーには古典的なところとは、ほとんど感じられない。シュベルトと共に完全に初期ロマン派の作曲家である。

ピアノ・ソナタ第1番にも、ウェーバーの音楽的特質、つまり、ロマン的な詩情、劇的な表現、色彩的な変化、技巧的な華麗さ、といったものがよくあらわれている。4楽章構成の本格的なソナタではあるが、古典的な形式にとらわれることなく、自由でのびのびとした雄大な作品である。アレグロの第1楽章は劇的な変化に富んでいる。アンダンテの第2楽章は叙情的な旋律で始まるが、特徴的なリズムも印象的である。メヌエットの第3楽章も主部のリズム的な面白さと中間部の旋律的な美しさの対比が見事である。ロンドの第4楽章は「無窮動」と題された個性的な音楽で、単独でもよく演奏される。

ソナタ

バルトーク(1881~1945)

この作品番号の付けられていないピアノ・ソナタは、1926年バルトークが45歳の時に作曲された。この1926年は、バルトークにとっては「ピアノの年」といわれており、彼の優れたピアノの為の作品が集中的に書かれた年である。ピアノは構造的には打弦楽器であるが、この作品では特にピアノの打楽器的な特徴が強調されている。つまり、美しく流れるような旋律はほとんどなく、不協和音が叩き鳴らされることが多い。このような打楽器的な扱いや騒々的な響きに音楽的な意味を認めるという姿勢は、いわゆる現代音楽の特徴の一つであり、その面白さはドビュッシーの印象主義の音楽やシェーンベルク達の無調音楽によって開拓されたものである。

曲は3つの楽章から成る。ソステヌート・エ・ペザンテの第2楽章は重厚で奥深い音楽であるが、アレグロ・モデラートの第1楽章とアレグロ・モルトの第3楽章は躍動感にあふれており、作品全体としては力強い変化に富んだリズムと多彩な音色の面白さが聴きどころとなっている。なお、特に第3楽章には、バルトーク特有の祖国ハンガリーの民族音楽的な特徴が目立っている。

曲目解説 須貝静直